

人づくりへの提言

——企業人の立場から未来を託す人びとのために——

昭和 58 年 10 月

社団法人 関西経済同友会
国民意識委員会

教育・人づくりという絆によって未来と現在は直結している。21世紀を新たな飛躍の世紀とするため、われわれは未来を託す人びとの人づくりに今こそ真剣にとり組まなければならない。望ましい人づくりとは何か、そのためには何を真に伝えてゆかなければならないか、という根本的な問題について広く議論を喚起してゆきたい。

〔「開かれた性格」の涵養を〕

これからの企業人像を念頭において、次にあげる3つの気風、性格をファンダメンタルズとしての「開かれた性格」として重点的に養成するよう提唱する。

① 失敗を恐れないチャレンジ精神

21世紀のわが国が、社会の成熟化からくる停滞をうち破り、新たな躍進をなしとげるためには、時代の気風としてのチャレンジ精神の存在が不可欠である。

② ユーモアのある精神

従来、わが国では儒教的禁欲主義の美徳のもとで、ユーモアはとかく不真面目なもの、軽いものとみられがちであったが、潤達な国際化と潤いある社会を実現するために、ユーモアの精神の涵

養も心がけてゆかなければならない。

③ 豊かな社交性

すぐれた才能や資質も、社会に有効なはたらきかけとなるためには、社会との接点をみつけ積極的にアピールしてゆく社交性が必要である。身内社会の殻を破り、他人と自分との間の距離を埋めようとする豊かな社交性を形成してゆかなければならない。

〔身近な具体的行動を〕

以上三点をより実効のあるものとするための具体的行動として次の三点を提唱する。

① 家庭における父親の精神的不在をあらためるべく、「新しい父性の論理」を強調する運動の展開

現代社会は「父性不在の時代」と呼ばれ、チャレンジ精神形成の核となるべき父親の存在感が稀薄になっているが、父親はみずからの存在の重要性をあらためて認識し、「新しい父性の論理」をそれぞれが確立しなければならない。

② ユーモアを形成するため、「出会いを求める心」を涵養する機会を増やす

ユーモアの源泉は人間に対する深い理解と共感であり、学校時

代における出会いはそれを学ぶためのまたとない機会である。上級学校への進学という画一的目標ではなく、豊かな出会いを求める心を涵養してゆくことがわれわれの責務である。

③ ボランティア精神の意義を評価し奨揚する運動の展開

豊かな社交性の形成のためには、みずからの選択と責任でおしきせの集団の枠を破るボランティアの精神が必要である。

学校の正課外活動や地域社会での活動は重要な訓練の機会であり、それを奨揚するため、大学入試の合格基準に、ボランティアな活動の実績を反映させることを提唱する。

当同友会としても、本提言を広く各界に訴え、国民意識を盛り上げていくと同時に、企業人としても、社員の新規採用にあたって「開かれた性格」に代表される気風が重視されることをあらためて世間にアピールし、それをより引き出す教育訓練、環境づくり、あるいは、人材の評価における加点主義的な考え方の推進につとめてゆく所存である。

1. 未来を託す人びとに何を伝えるか

—— われわれの問題意識

子供は未来からの留学生である。われわれは、時代の最高の文化と技術と、生きてゆくためのあらゆる英知を彼らに伝え、未来に送り届ける責務を負っている。

21世紀を生きる彼らの眼前に広がる世界は、今この時代に生きるわれわれにとって想像上の新大陸でしかない。しかし、彼らがその新大陸でなしとげることの何ひとつとして、われわれが伝え、育くむことによらないものはない。教育・人づくりという絆によって未来と現在とは直結しているのであり、未来に対するわれわれの責任は重大である。

教育・人づくりについて、われわれの父祖は多大の努力を払ってきた。明治初期、欧米列強に伍した国づくりを進めるためには何よりも人づくりが最重要の課題であると、いちはやく感じとり、歴史上特筆すべき熱意と迅速さで教育を普及させていった。その内容については慎重な反省を要する点もあったにせよ、均質な知識水準の形成は、日本の今日までの発展の大きな礎石となっている。

われわれは、父祖の残した礎石の上で、21世紀を新たな飛躍の世紀とするため、未来を託す人びとの人づくりという課題に、今こそ真剣にとり組まなければならない。

元来、教育の理想は、知育、徳育、体育の三位一体であり、その三

つが整ってはじめて、十全な人づくりが可能であるとされてきた。学校教育のカリキュラムをみても、その考え方が受けつがれてきているといえよう。ところが、現実には、知育とは名ばかりの暗記作業と、現実の社会では何の意味も持たない偏差値という一片の数字で万事を相対化して考える訓練を身につけさせている間に、徳育は規範の混迷の中で何時しか置き去りにされ、今また体育さえも軽んじられている。

われわれは彼らに伝え忘れていたものはないだろうか。

教育に関する議論は盛んである。しかし、それらの多くは、現状の教育の荒廃の原因を戦後教育制度に求め、制度の改革によって打開しようというものである。もちろん、こうした議論は教育関係者のみならず多くの国民の参加が求められるところだが、われわれは企業人として、そうした議論のあることを踏まえつつ、人づくり、特にこれからの企業人に求められるものと教育のあり方について広く議論を喚起してゆきたいと考える。

かかる問題意識のもとに、今年度の関西経済同友会国民意識委員会は、まずその足がかりを得るために、会員企業のなかでとくに活躍している中堅社員諸君の協力を得て、彼らの性格特性がどのような環境下で形成されたものかを集計、抽出する簡単なアンケートも試みてみた。（巻末付表）

当委員会は、本年度の研究活動を踏まえ次のとおり提言する。

2. 「開かれた性格」の涵養を

未来を生きる日本人が豊かさのなかでみずからを見失わず、真に生き生きとした社会を実現し、また、国際社会のなかで強力なリーダーシップを発揮してゆくため、彼らに求められるものは多岐多様である。

そのなかで、われわれは、特にこれからの企業人像を念頭において次のような気風、性格を、あらゆる能力、資質に先行するものとして重点的に養成するよう提唱したい。

第一は、失敗を恐れないチャレンジ精神の養成である。

それぞれの時代には、時代の気風、とでも呼ばれるべきものが存在する。ヨーロッパにおける大航海時代、新大陸の開拓時代、アメリカの黄金の60年代、また日本においても堺の商人たちが黄金の日々を謳歌した安土桃山時代、新時代創生の意気に燃えた明治時代、そして戦後の高度成長期、これらの時代の共通した特徴は、歴史上特筆すべき大躍進期であったと同時に、その時代を支配していた気風が、失敗を恐れないチャレンジ精神であり、野性的な冒険心であったということである。

21世紀のわが国が社会の成熟化からくる停滞を打ち破り、次の新たな躍進をなしとげるためには、チャレンジ精神の不断の発揮が不可欠である。

ところが、こうしたチャレンジ精神の養成に、現在のわが国教育は

十分な配慮を払っていると言えるだろうか。

学校においては、偏差値教育という進学管理システムが、子供たちを入試失敗のリスクから救うのと引きかえに、チャレンジの意欲を奪っている面が少なくない。家庭においては、父親の精神的不在からくる、いわば真空状態が、父親にチャレンジし乗り越えるという経験をもたない子供たちをつくり出している。

われわれはこうした現実を改め、21世紀を新たな躍進の時代とするために、チャレンジ精神の養成をまず第一の課題としなければならない。

第二は、ユーモアの精神の涵養である。

われわれ日本人は、元来儒教的な禁欲主義を尊び、ものごとに脇目もふらず一途に打ちこむ姿勢が美しいという観念をもっていた。

この美風のもとで、ユーモアはとかく不真面目なもの、軽いものという扱いを受けがちであったことは否めない。

その結果、日本人は与えられた目標に一致団結して突進し、その間に遊びや余裕の乏しい、テンション民族と呼ばれることにもなった。こうした認識は、日本人に対する海外からの理解を妨げる一因ともなっている。

今や国際化本番の時代を迎え、世界の人びとと直に接し、一人ひとりのレベルにおいて国際交流を進めてゆく段階にきていることを考え

ると、人間関係の潤滑油であるユーモアの精神を持ち合わせることは、ますます重要になってくると言わなければならない。

また、高齢化が進行してゆくなかで、暖かく明るい社会をつくりあげ、潤いのある人間関係を楽しんでゆくためにも、お互いのユーモアがより一層求められるようになろう。

われわれは、後継者たちが闊達な国際交流と、楽しい社会を実現してゆけるよう、ユーモアの精神の涵養も心がけてゆかなければならないと思う。

第三は、豊かな社交性の形成である。

どんなにすぐれた資質や才能であっても、それが社会に求められ、社会に対して有効なはたらきかけとなるためには、自分と社会の接点をみつけ、積極的にアピールしてゆく社交性が必要となる。企業人は言うに及ばず、孤高の芸術家においてさえも、一生涯、社会から何の評価もされず、社会と何の接触ももたなかった例は稀である。

当然のことながら、ここで言う社交性とは、酒に誘われたら断わらないというたぐいの、自主性のない付き合いの良さをさすものではない。他人を他人と認め、自分との間にへだたりがあることを認識しつつ、積極的にその距離を埋めようとする努力である。

われわれ日本人は、ウチ面とソト面がはなはだしく違う場合が多い。他人行儀という言葉があるように、他人は他人としてつき放してしま

う一方、身内の間では人と自分の距離が見えなくなり、何でも許されるような気分になりがちである。

わが国教育の現状においても、集団行動の訓練は徹底して行なわれるのに対し、他人を他人として積極的にアプローチする訓練が軽視されているきらいがある。現状では、子供たちは十数年にも及ぶ学校教育期間を、同年齢層でつくる身内社会の経験しかもたないで終えることになりかねない。

われわれの伝えるべきものは、身内社会での立居振舞いではなく、本来の意味での豊かな社交性である。

以上かかげた三点、チャレンジ精神、ユーモアの精神、豊かな社交性、これらを総称して「開かれた性格」と呼ぼう。

「開かれた性格」から導かれるイメージは「生き生きした健康な人間」であり、あらゆる事態に対してフレキシブルな対応のできる人間である。

今後将来にわたって、社会がその活力を発揮してゆくためには、あらゆるタイプの人間、型にはまらない多彩な才能の輩出が望まれることは言うまでもない。そのような才能、資質が、この「開かれた性格」の上に花開くことによって、社会に対して強い影響をもち、新しい時代を画してゆくことをわれわれは期待する。

その意味からも、ファンダメンタルズとしての「開かれた性格」の養成をこそ最優先の課題としたい。

3. 身近な具体的行動を

人づくりは、かくあれと教えればすむ問題ではない。長い年月をかけて、無意識のうちに心のなかに刷りこんでゆかなければならない。忘れてならないのは、人づくりとは結局のところ、人と人との触れ合いの集積であり、徒らに方法を論じたところでそれにあたるわれわれの意識が変化しない限り、ことの本質は変わらないであろうということである。われわれは、みずからの意識の変革から始めるべきであり、そのために、着実な具体的行動を積み重ねてゆかなければならない。

くり返しになるが、人づくりは長い年月をかけて行なわれなければならない。21世紀の人づくりは、今からでも間に合うが、今はじめないと間に合わないのである。

かかる認識のもと、われわれは具体的行動として次の三つを提唱する。

第一は、家庭における父親の精神的不在をあらためるべく、「新しい父性の論理」を強調する運動の展開である。

子供の心にチャレンジ精神を植えつけるのは本来父親の役目である。母親が、優しく抱き育くむ存在であればこそ、子供が最初にチャレンジしようとする相手は父親でなければならないことは、人類の長年の経験であり、心理学の分野においても学問的に明らかにされている。

不幸にして父親がすでに亡い場合でも、母親の伝える父の記憶が象徴としての父親の役目を果たすことは、われわれの知っているとおりである。

しかるに、現代は「父性不在の時代」と言われる。核家族化のなかで、家庭における父親像は、極めてあいまいなものになっている。母親の高学歴化、経済的地位の向上は、子弟の教育の各面にわたる母親の影響力を強めてきている。一方、父親については、それを通して社会的存在としての自分を発見し、理解し、みずからの目標を打ちたてるべき父親の生きざまが見えにくくなっている。

幼児期における躾教育の担当者としての母親、慈母としての母親の存在、役割りの大きさはあらためて言うまでもない。しかし、父親が、子供の教育は母親に任せてあるといった有限責任論を家庭にもちこむようなことがあってはならない。父たる者、家庭に対して無限責任を負うことをあらためて認識すべきである。

戦前風の家長的厳父を求めることは、それを支えていた制度や環境が伴わない現在、ひとつのノスタルジーであろう。

子に臨んで行使されるべき父性の論理は、かたや父の個性により、かたや子の個性により、それぞれ違ってしかるべきであるが、重要なのは父が子の発達段階を見きわめ、適切な規制と励ましを与えること、そしてみずからの生きざまを真摯に子にぶつけることであろう。そうすることにより、父の姿は子にとっていつかは超えなければならない

「超えられぬ壁」として、はっきりと意識されることであろう。

父親のあり方について国民的論争を喚起し、父親がみずからの存在の重要性をあらためて認識し、「新しい父性の論理」をそれぞれが確立すべき国民運動の展開が急務である。

第二は、人間に対する深い理解と共感を育くみ、暖かいユーモアを身につけてゆくために、「出会いを求める心」を涵養する機会を増やしてゆくことである。

ユーモアの源泉は、人間に対する深い理解と共感である。人はそれを出会いのなかから学びとる。

学生時代における、恩師、友人、書物などとの出会いは、またない機会である。洋の東西を問わずその時期を黄金の時代と呼ぶのは、人生において最もすばらしい出会いが用意されている時期であるからであろう。

しかし、出会いはそれを求める人の心にしかインパクトを与えない。先生との親しい対話も、名著から受ける感銘も、みずから求めなければ時間は無感動に流れてゆく。

出会いを自分のものにできるか否かは、結局のところ、群れを離れて自分自身の出会いを求めるかどうかにかかっていると言ってもよいであろう。

ところが、わが国教育の現状は、上級学校への進学という画一的な

目標の中で、「試験に役立たないことはやらない」「学校に評価されないことはやらない」という風潮が支配する懸念すべき状況にある。

こうした風潮を排し、豊かな出会いを求める心を涵養してゆくことが、われわれの責務であると考ええる。

そのためには、子供たちが出会う先生方のそれにふさわしい対応や、友人との語らいのゆとりある時間などが求められようが、さしあたり、より多様な出会いのための一助として、学校教育において、読書の時間を一層充実させることを提唱する。もちろん、指導にあたる先生方の資質のより一層の向上がその効果を高めることは言うまでもない。同時に、家庭においても、親の本棚の充実、たとえば、子供がそれを盗み読みしたくなるような宝の山が家庭内にあることも、出会いの幅を一段と広げることになろう。

第三は、「ボランティア精神」の意義を評価し、奨揚する運動の展開である。

他人を他人と認め、自分との間にへだたりがあることを認識しつつ、その間を埋めようとする努力としての社交性は、身内社会が優先する日本では訓練されにくいものである。

積極的に自分を相手に伝えようとするはたらきかけは、みずからの選択と責任で、おしきせの集団の殻を破ったところで芽ばえる。

たとえば、未知の世界にとびこみ、現地の人びとに溶けこんで活躍

している海外青年協力隊員の例は、旧来の内弁慶な日本人のイメージを払拭するものである。

われわれは、日常生活のなかで、つとめてそのような環境を求めてゆかなければならない。

その意味で、学校の正課外活動や地域社会での活動を含めたボランティアなグループの活動は、子供たちが得ることのできる数少ない訓練の機会の一つであろう。みずからの選択で、新たなひとつの模擬社会を経験することは、馴れ合いの許されない人間関係を会得するのに有効である。同時にそれは、すでに指摘したチャレンジ精神の養成に大きく寄与することにもなろう。

しかし、ペーパーテスト重視の現在の入試制度下においては、そのような活動に熱心であった者が結果的に不利な扱いを受けることになりかねない。

われわれは、ボランティアな活動の実績を正しく評価し、奨揚するために、大学入試において、正課外や地域における活動の実績を反映させ、それを合否の判定材料の一つとすることを提唱する。

以上の提言を、われわれ自身みずからの課題として取りくむことはもちろん、当同友会として今後あらゆる機会を通じて広く各界に訴え、国民意識を盛り上げてゆきたい。

同時に、企業人としても、社員の新規採用にあたっての基準が、今や「開かれた性格」に代表される気風を重視したものとなってきたことをあらためて世間にアピールするとともに、それをより引き出すような教育訓練あるいは環境づくりにつとめてゆきたい。

人材の評価においても、加点主義的な考え方をすすめてゆくことが肝要であろう。

これからは、社会においても、企業においても、どれだけ多様な人材を包容できるか、そしてその能力をいかに引き出してゆけるかが、その活力を左右するであろうことを、われわれはあらためて銘記したい。

以 上

(付表) 「 中堅社員アンケート調査結果 」 について

当委員会では、提言に先立ち、会員企業でとくに活躍している中堅社員諸君の協力を得て、アンケート調査を行なった。本調査は、彼らの性格特性がどのような環境のもとで形成されてきたかについて聞き、
 相関関係を測定したもので、以下はその結果である。

性格、価値観 環 境		性 格 特 性				対 人 価 値				個 人 的 価 値		
		自 信	チ ャ レ ン ジ 精 神	ユ ー モ ア	社 交 性	支 持 的	同 調 的	承 認 的	独 立 的	実 際 的	達 成 的	目 標 志 向 的
高校時代の クラブ活動経験	有 無		○	◎	◎							
大学時代の クラブ活動経験	有 無	○			◎			◎	◎		◎	
クラブ委員 クラス委員経験	有 無	○	◎	◎	◎							
印象的な「出会い」 の経験	有 無		◎	◎	◎		◎			◎		
父の影響を強く 受けたか	Yes No	○	○									◎
母の影響を強く 受けたか	Yes No								◎	○		
父の影響が母の 影響より強い	Yes		◎						○			◎
母の影響が父の 影響より強い	Yes					○	○			◎		

(注1) ◎印 危険率1%以下で有意な相関あり。

○印 // 5% //

(注2) 〔対人価値〕 個人が対人的な関係でどのようなことに重きを置くかによって示される価値観。

支持的 : 人から理解をもってあつかわれ、親切や思いやりをもって扱われる。

同調的 : 人びとから受け入れられるよう、規則に従い、社会的に当をえた行動をとる。

承認的 : 人から尊敬や賞讃を受け、重要な人物とみなされる。

独立的 : 人からの干渉をきらい、自分の思うとおりに行動する。

〔個人的価値〕 非対人的環境のなかで、どのようなことに重きを置くかによって示される価値観。

实际的 : 金を費した分は必ず手に入れる。十分ペイすることだけする。

達成的 : 困難な仕事にチャレンジしたり、きわだったやりかたで仕事をかたづける。高水準の仕事をする。

目標志向的 : 仕事の明確な目標をもち、それをめざしてがんばる。自分が何をしようとしているかをよく知っている。

昭和58年度 国民意識委員会常任委員会名簿

(敬称略)

委員長

小 玉 保 次 三 和 銀 行 専 務

副委員長

横 井 克 己 松 下 電 器 産 業 取 締 役

金 杉 三 夫 ヤ ン マ ー デ ィ ー ゼ ル 専 務

宮 崎 誠 司 住 友 電 気 工 業 法 務 室 長

常任委員

青 山 直 一 竹 中 工 務 店 常 務

秋 山 喜 久 関 西 電 力 秘 書 役

白 井 剛 住 友 生 命 保 険 常 務

遠 藤 浩 大 阪 ガ ス 専 務

木 村 辰 雄 カ ツ ヤ マ キ カ イ 社 長

河 野 俊 二 東京海上火災保険
(58.9.7 本社へ異動のため辞任) 常 務

坂 井 信 介 東 洋 紡 績 企 画 部 長

芳 賀 洋 芳 賀 電 機 社 長

平 木 英 一 サ ン ト リ ー 常 務

吉 田 正 司 日 本 ヴ ィ ッ ク ス 専 務

吉 田 照 雄 東京海上火災保険
(58.9.7 就任) 常 務

吉 村 正 男 住 友 信 託 銀 行 調 査 部 長

昭和 5 8 年度 国民意識委員会活動状況

4 月 2 8 日	○正・副委員長会議
5 月 2 6 日	○常任委員会
6 月 1 3 日	○講演会 京都大学教授 河 合 隼 雄 氏 「教育問題の根源を探る」 ○常任委員会
6 月 1 4 日	○常任委員会
6 月 2 3 日	○講演会 日本経済新聞社論説委員兼編集委員 黒 羽 亮 一 氏 「日本の教育を荒廃から救うものは何か ―企業への期待を中心に―」 ○常任委員会
7 月 1 日	○講演会 大阪大学教授 山 崎 正 和 氏 「日本的成熟社会における教育の役割と課題」 ○常任委員会
7 月 1 2 日	○講演会 豊田工業大学専務理事 山 本 恵 明 氏 「これからの企業人像と教育における企業の果たすべき役割 ―豊田工業大学の教訓から―」 ○常任委員会
9 月 5 日	○常任委員会
9 月 2 2 日	○常任委員会
1 0 月 5 日	○幹事会に本報告書を提出

